

今案實も男子ならましかは古今ならひなき大體學生な

るへし

又云宮のおまへにて文集の所々よませ給ひなとして
さるさまの事しるしめさせまほしけにおほいたりし
かはいと忍ひて人のさふらはぬ物のひまをにをと
としの夏頃より樂府といふふみ二卷をそしとけなく
をしへたて聞えさせて侍りしもかくし侍り

今按此日記の趣にて式部か學窓の厨子とはしらの
間に頭さし入て眞名文よみし有様日本紀史記白氏
文集なとくはしき事は知られたり此外三史五經
のみちしきと佛家の經疏諸家の日記就中李部王
の記なくは
うつほ竹取
と見たり和歌の集古今集以下
の集古き物語正三位以下
と見たり管絃詠曲あはせ香繪かく事裁縫なと諸道に通した
る趣はなを日記并に物語の體にておしはかるへし
惟よりもあやしきまでさとく侍りしを思ふに童
女の時よりも聰惠強記にして天然の才器也彼大さ
なる厨子ふたつに障もなく積たる書は何にてか侍
りけんいともゆかしくそ侍るされは徳も才もうち
あひたる賢婦人の書たる物語なれば容易に看過す
へからず

○其二 七事共具

父爲時は菅三品文時卿の弟子にて高名の學者又歌
をも讀て集にも撰はれたり是を父として生れ其
兄惟短も後拾遺より初てすゑの集にも入たる歌人
也それか物ならひつゝおそくよみとりかつ忘るゝ
所をも式部はあやしきまでさとりしを見れば聰明
自ら神童なりけらし其二をさなき程にさかしさと
ても女は學問とけかたき物なるを彼學窓のさまを
思ふにうちつゝ和漢の積書をよみ音樂以下の業
におこたらざりしと見ゆ千載集に云上東門院に侍
りけるを里に出けるころ女房のせうそこのついで
に筆傳へにまうてんといひて侍りければつかはし
ける
式部一編
露しけき蓬のものむしのねをおほるけにてや入
の尋ん
此等の傳授にても其樂才おしはかるへし其三禁裏
院中宮東宮親王攝家の御かたに參りあそひて元
日節會よりはしめて追儼に至るまで恒例臨時一と
せの公事或は歌合繪合せ香合せ蹴鞠なと優美なる
ことのかきりに其まなこ肥たり其四時代もあまり

は前後に此物語はとの物見えざるもことばりにな
ん

○其三 修撰年序

日記寛弘五年
霜月の文云左衛門の督わなかしこ此わたりに若む
らさきやさならふとうかひ給ふ源氏にかゝる人見
え給はぬにかのうへはまいていかて物したまはんと
聞えたり

今案此文を以てみれば物語は今年より以前に出来
てはやく宮中に流布してをとかたにもよまれた
ればこそ式部をさして若紫と稱せられけれ

又同六年正月の文云内のうへの源氏の物語人によませ給ひつ
ゝさこしめしけるに云々

今按これは往事を追記したればこれより先何れの
ととさためかたし

又同年云源氏の物語おまへにあるを殿の御らんして
云々

今案河海抄に寛弘のはしめに出来てとかせ給へ
るはこれらの文によりてにやいかさまにも長保の
末寛弘のはしめ式部やもめすみにて里にはへりけ
るつれゝに作りたる歟寛弘五年に道長公四十三

上つかたならずまた衰世たらず中葉にして文質か
ねたる世に生れたり 其五須磨明石住吉難波泊瀬石
山宇治大原野嵯峨野西川東川江口神崎のわたり小
野の奥鞍馬の谷比叡の山鳩の峯なと女にてはあま
りある迄名所舊跡を歴遊したりとみゆこれ皆才氣
のたすけとなれりかの鹽津山にてよめる歌は父か
任國へ下りたる時などの作るへし續古今集に云しほ
ゆくにしつのをいとあやしきましてなをからき道なといふ
を聞てよめる式部しりぬらんゆきまにならすしほつ山よにいふ
道はからき物と懸津 玉かつらの巻に常陸のことを書
るは外祖常陸介爲信或は母の物かたりなとを聞た
るにや 其六一部の意と詞とをのこにてはかくこま
やかならぬ物なるを女なればをのこの思ひよらぬ
事まで筆をわたしたり女にても上の品なる人は下
さきのわざをしりたまはずまして下のささみはい
かゝ上を思ひ及はんや式部たまゝ中の品に生れ
て思ひいたらぬくまなし 其七これらを兼備したる
式部なればかの石山の冥助をからすともおのつか
ら此物語いてきなまし観音はさつを思ひかくるも
後人の臆説にして式部をしらざるものといふへし
右の七事うちあひたる人はをさゝりありかたけれ

歳にて式部に艶言のたまひ同六年に渡殿の戸をた
ゝきわひ給ひしなとを思へはいたく老嫗とも見え
す又みつからさた過たるよし書たればわかきか
りなる女とも見えす榮花物語殿上花見の巻に中宮威子三
十一二にならせ給ふをさた過給ふと書るを思ひ合
すへししかれば物語は式部三十歳前後にて作れる
なるへし大和もろこしとも聴敏なる人は何事に
よらず不日に其功をなすものなれば此物語も思ひ
の外たやすくかける物なるへし後の人にぶき生れ
つきを以て例するゆへに奇妙不思議の思ひをなし
て観音の冥助或は父爲時かちからをそへ或は御堂
殿の加筆なとさまの臆説を申すめり皆式部を
しらす書を考ふるにおろそかなりといふへし
或人云榮花物語浦々の別長徳二年の文に内大臣伊周公
のかたちをほむるとてかの光源氏もかくやありけ
んと見ゆるなと書たり然れば此の物かたりは長徳
より前に出来て世に流布したればこそ赤染右衛門
も伊周公を源氏にたとへて書けり如何答云されは
こそ爲章曾て榮花を赤染か作にあらずと申は加様
の所おほければなりその榮花は赤染や紫より後の

人古記をとりあつめて其間に詞をくはへて全書と
なしたる物とみゆ初花の巻はやかて紫日記をとり
てしたてたり日記に赤染衛門清少納言和泉式部齋
院中將などの評をもしるしたれば其人々存生の日
には世にもらすへき物にあらず赤染もまた同時同
輩日記をありのまゝにぬすみて初花の巻をつくる
へしやよく思ふへし又布引の瀧の巻は堀川院
御世の事をしるしたり赤染もし存命せば百數十歳
なるへしいまた左様に長壽の名をさかす此はかな
を赤染か作ならぬ證據おほけれとも事長ければさ
しおき侍るへし相かまへて浮説妄傳にまよはずた
ゝ本書をくはしくよみてこゝろみらるへしといへ
は問人なはいなかしき顔してまかてぬ榮花物語を古
ひて男の作なるへ
し別にしるし侍り

○其四 文章無雙

物語のうち和歌ならひに詞ともに萬葉古今伊勢物
語うつは竹とりなどの古跡をはなれて物やはらか
におほとかにやすらかにやさしくおほよそ吾國の
風流を盡したれば見る人をして倦事をしらすしむ
まことにやまとみみの上なき物也全篇は富貴温潤
の氣象にして官祿の文章なれとも中に山林出世の

り市井田家あり貧困哀傷あり閑情風景は巻ことに
見えて情をうつし景をかたるとる事まのあたり其人
にむかひ其所に遊ぶかことし全體は傳にして又お
のつから序の跡あり跋あり記あり論あり書ありて
諸跡そなはれりかのはゝさゝの巻の品定はことに
奇妙なる物なり爲章曾て其章段をあらため侍りけ
る時に序して曰く論破あり論承あり論腹あり論尾
あり愈より細にいり俗より雅に趣き繁より簡に歸
し波瀾頓挫熟應伏案なといふもろこしの文法をの
つからそなはり其氣脈は悠揚として寛裕にその文
勢は圓活にして婉曲なりこれ品定のみならず一部にこれ
を漢文にて見侍らば史記莊子韓柳歐蘇にひとしか
るへし女の筆にてはめつらかにあやしく式部は誠
に古今獨歩の才と云へしいにしへより清紫といひ
ならはしたれと清少納言は才氣狭小にしてさかし
たちたる跡あらはににくさけおほき物なり同日に
も論すへからす以上品定序の略或人云式部は文章を以て何
にても實録をかゝすして無用の作り物語をのこし
ようせすは誨淫の媒となることいと念なき事な
らすや答云之すなはち爲時か男子にてもたらぬ嘆
なり男子ならましかは一部の國史を撰ひて萬代の

龜鏡にそなへ侍りてまし女なれとも英才ついに
はふ事を得ずしてそれに似つかはしきもの語つく
りて閨門の風儀用意を教たるがすなはち式部なり
「物かたりと日記とをよみて其氣象をはかるに式部
はいはゆる甚しき事をせざる人なりさかしたちた
る事をさらひたる人なりもし實録めきたる事を書
たらは女に似つかはしからず甚しき事也賢たちた
る事なりしからは式部か平生の用意とは相違すへ
したゝししひて實録をもとめは彼日記はすなはち
實録なるゆへに榮花物語初花の巻は全く之をとり
もちひたりその日記むかしは定めて數十年の卷々
ありぬへけれと世に傳はらざるは不幸といふへし
今解る所の日記は
僅に其殘篇と見ゆ又云物語をよみて其旨をうる人はそ
の身の風儀用意をかへりみてをのこも女もをの
か
し、一箇の好人となるへしもし誨淫といは、國風
に淫奔の詩を載られたるもさなんそしるへしや美
刺勸戒は詩歌の徳なるよし先達のをしへ丁寧なり
といへともわれら愚かなる意にては勸戒うつりか
けうしていかにそや事たらはぬやうにおほき侍る
に〇此物語なん遠く儒佛によらずして近く和國の

人情風儀を以て美刺を言外にしらせたれば感味ふかくしておのつからすきしきふるまひをにくみ實々敷心のすち厚く成行くやうにおほえ侍る式部をしらざる人は誨淫のそしりあるへし式部をしる人は勸戒のあきらかなるを思ふへしされば此物語を歌道の經典にそなへ侍らまはしは侍らぬかといへば或人うなづきて吾國いちはやびたはしき人のむまれなれば直諫は入かたうしてその物やはらかなる諷諭なん病に應ずる藥にて實も歌道の本意に侍りてんといふ

○其五 作者本意

此物語もつはら人情世態を書てかみ中下の風儀用意をしめし事を好色に寄て美刺を詞にあらはさず見る人をしてよしを定めしむ大旨は婦人の爲に諷諫すといへともをのつからをこのいましめとなる事おほし一つ二つを擧て例せば桐壺の帝の色をおとんして更衣に寵遇すきさせ給ひ人のそしりをもえは、からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなしを上達部うへ人よりはしめ天か下のもてなやみ草にならせ給ふは帝徳のはつかしき御事

にして後代のみかたとを諷諫し奉るにあらすや且源氏の君をわたくし物におもほして御元服より以下何事も東宮にとらすもてなし給ひようせずは儲位をもとりかへまほしう見えさせ給ふは敷心の淺ましきならずや弘徽殿のおしたちかどしき所ものし給ひてみかとの御なけきを事にもあらず思しけちたるは后妃の徳いつくにかおはしますこゝもとをよみ給ふ女御后より以下その風儀用意をかへり見給はすはまたあしきさまのうたてき名をおひ給ふへし次には、き、の巻の品定は一篇の女誠なれば女といふ女によみならはせ度こそまたうつせみと軒端の萩か園基の有様園中もぬけの衣といきたなさと教戒あらはなる物なりその空蟬か無心にしてやみなむと思ひはてたるは用意いみしき者にして式部か志なり又次に夕顔かもてならしたる扇にをかしうかきすさひたる歌けすきしきとかやなをおもかりぬへしざるはあまりやはらかにおほときて物ふかくをもさかたのをくれたるよりはたして横さまに身まかりぬえ之をさく女はわたなる人にすかさるゝ事を思ふへし源氏のうかひたる

心のすさみに人をいたつらになし我御身も堤の程にて馬より落ちていみしく御心地まといたるは貴公子の微行をいましむ惟光かかゝる道にむて奉りたる罪は猶淺からず近習たる人是を思ふへしこれより以下のまき、みな此まなこをつけてよみ侍ら

は其人の行跡情態か、みにうつすことく妍醜のかるゝことなく世のいましめとなりなんこと作者の本意にして徒作にはあらざるへし中にも藤壺を源氏の犯して御子をうみ後に御位につけ奉りてすなはち源氏執政し給ふはまことに公家の御鑑にして國相以下の身をひやすへき事也、次に論ずさりとてむかし物語なればいふもの罪を得ずして聞人をのつからかへりみとなればすなはち諷諫にして諺にいはゆる綿にて頸をしむるとかのたくひなり蓋の巻にいはいくその人の上とて有のまゝにひ出る事こそなけれ善も悪も世にふる人の有様の見るにもあかす聞にもあまる事をのちの世にもいひつたへさせまほしきふし、を心にこめかたくていひ置はしめたるなり云々是古き章子を論するやうにてやかくて式部か意趣と見ゆれば物語をすへて作りこと

紫女七論

とのみいふへからすみな其世にありし人のうへをのへて勸善懲惡をふくめたり此本意をしらすして誨淫の書とのみ見るともからは無下の事なりまた詞花言葉のみもてあそぶ人は劍の利鈍をいはずしてた、柄室のかさりを論するかことしをよそ一部の詞花といひ警戒といひ花實かねそなへたる歌書なれば此道の全經といふも過稱には侍らしかし

○其六 一部大事

冷泉院の御事をあはひは作り○物語也深く沙汰する事なかれといひ或は仔細あることなりとしきりにこれを秘し或は此趣向の見にくさにて一部の物語とりてだに見まほしからすなと申すともからも侍りともに式部か立意を知らざるものと云へし爲章誠に今按をしるして識者の是非をまら侍るへし桐壺巻云源氏の君はうへのつねにめしまつはせは心やすく里すみもえしたまはす心のうちにはた、藤壺の御ありさまをたくひなしと思ひきこえてさやうならん人をこそ見めにる人なくもをほしけるかなと云々

まに書なし紫の巻にて懐妊をしらせ紅葉賀にて御誕生あふひの巻にて立坊みをつくしにて御即位を冷泉院と聞ゆさて薄雲の巻に夜居の僧の密奏にて朕は實には源氏の御子のよしを始めてしらしめしたれとも誰にとひあはせ給ふへきひともなきま御みつからふるき例を考へ給ふとて

いよ／＼御學問をさせ給ひつゝさま／＼の文ともを御覽するにもろこしにはあらはれてもしのひても亂りかはしき事いとおほかりけり日本には更に御覽したる所なしたとひあらんにてもかやうに忍びたらん事をはいかてか傳へしるやうのあらむとする云々若菜の下巻に柏木の右衛門督の女三宮へかよひたるを源氏しり給ひてさま／＼思案の所にはいはいく帝の御めをもあやまつたくひむかしもありけれとそればまたいふかたことなり宮仕といひて我も人も同じ君になれ仕ふまつる程に心をかはしそめ物のまされおほかりぬへきわさ也女御更衣といへともあるすちかゝるかたにつけてかたはなる人もあり心はせかならずおもからぬうちましりてをもはすなる事もあれとをはるけのさたかなるあやまち聞えぬ程はさて

もましらふやうもあらむにふとしもあらはならぬまされありぬへし帝と聞ゆれとたすなほにをはやけさまの心はえはかりにてみやつかへの程物すさまじきに心さしふかきわたくしのねきことになひきをのかしゝあはれをつくし見すくしかたき折のいらへをも云そめしねんに心かよひそむらんけしきに出すへき事にもあらずなとおほしみたるゝにつけて故院のうへもかく御心にはしらしめしてやしらすかほをつくらせ給ひけんおもへはその世の事こそはいとおそろしく有ましきあやまちなりけれ

今按此書様を思ふにむかしの事にも又は近世の事にも式部が見聞する所に感して書るなるへし丁寧反復その意淺からすよむ人たやすく看過すへからす伊勢物語に二條の後業平申將通後撰集の京極御息所元良親王に榮花物語に花山女御實公に心を麗景殿女御承香殿女御とも頼定期に通これらの御かた／＼ころばせをもちらすして私のねきことになひきたるなるへしされとも幸にして物のまじり日の本には御覽したる所なかりしとそいともましき筆にて侍りもし皇胤御一代にても在原氏藤原

氏なとに紛わらはわか國の御爲ものうき事にして東海をふむ魯仲連ありぬへしざるは藤壺に源氏のかよひて冷泉院をうみ給ふはまことにあるまじきあやまちなして源氏は淫蕪の罪おもしろいととも皇胤のまされおもしろなるかたにあらす桐壺の帝の御爲には正しく子なり孫なり神武天皇の御血脉なり伊勢の宗廟その祀をうけたまひ天下の蒼生其政をいたし奉るへしそれすら猶冷泉院の御後をすて、朱雀の正統にかへせるはいとまきひしき筆にあらすやそも／＼一旦人倫のみたれとなかく皇統のまされといつれかおもくいつれかかろかるへしや斷案を下しかたしといへとも臣下のこゝろにていは、源氏の罪をしらざるまねして皇胤の思はぬかたならぬをよるこふへししからは式部か立意をしはかるへしさしもに用意ふかき式部か當時宮中にも披露する物語に心得なくて書へしや此造言諷諭に心つかせ給ひていかにも／＼物のまされをわらかしめふせかせ給ふへしよらせすはうたかはしき事ありぬへしかの二條の後なとの密事を思へはをそろしきことならずや上にしるす源の心は

皆式部か心にて私通のさまをあり／＼としらせまいらするなり臣下はまた蕭大將のまされを見て用意あるへしもろこしにはみたりかはしき事おほかりけりとは史記に秦の始皇は實には呂不韋か子也楚の幽王は黃歇か子なる事をしるせり讀史管見に胡致堂是を論して云古之有國有家者雖買妾必擇其良一若胡無禮義廉耻尙且盪鴈正世惡族類之靡也而況諸侯乎何羸楚悅色納姫不疑其故遂使大買生販心焉自是有天下者蓋呂姓也柏翳宗廟至是而絶云々鶴林玉露に羅大經もまた論して云秦虎視山東蠶食六國不知六國未滅而秦先滅矣何也始皇乃呂不韋之子則是羸氏爲呂氏所滅也司馬氏欺人孤寡而奪之位不知魏滅未幾而晉亦滅矣何也元帝乃牛金之子則是司馬氏爲牛氏所滅也云々これ他の國の事にてすらこゝろよからす況朝廷は皇神のさつけさせたまひしよりこのかた萬世一系さらにまされさせ給ふ事なきをやもし末の世にも女御更衣のうちに心はせおもからぬうちましりて帝系のまされもいてきぬべしやと遠くおもひはかりし諷諭をみれば式部は女なれ

ともその性質の美と學問のちからとうちあひて識見をのつから大儒の意にひとしと云へしまたかはる大將の事は天道好還の理をしめしたるおもむき羅大經か筆におなしこの一件は一部の大事にして講する人の意得あるへき事なり或人云さしもにやさしくはかなく書いてたる物かたりをさやうにこはしき道理を儲て論をたつること式部か本意にてはあらざるへしや答云品定云なとかは女といはんからに世にあることのおほやけわたくしにつけて無下にしらすいたつらに死しもあらんわざと習ひ學ねともすこしもかたらむ人の耳にも目にもとまる事しねんにおほかるへし云々日記云すへて人はおいらかにすこし心をきてのとやかにをちぬるをもととしてこそゆへもよしもをかしくこゝろやすければまた物語に始には源氏と藤壺の密事をいともやさしさまにかきなし終りにはいとおそろしく有ましきあやまちなりけれと斷りたる氣象を見よ頭書云夕親卷にも我心ながらいふすちにおほけなぬへきことばあるなめりと書たるも藤壺に心かけ給ふことそのそらそらしきむくひいと源氏のなす事也此外一部の中にそのひとくの癖をのしるしたるさまと日

記に赤染清少納言和泉式部など諸人を評したる所くを見て紫に心をさ給へつゝやかにたましひある女なりさる心より書いてたる物語なればひとへにやさしくはかなき物と見給はし紫をしらす物語の本意をさくらすして只詞花言葉にのみひかるといふへし本意は道理つよけれとも物いひふりのやすらかにはかなくえんにやさしく書なす事女の筆にしてしかも上手のしはさなる物なりかのおそろしきぬのしゝをもふするのとこなとよみつればあはれなりと寂蓮法師かいはるも思ひあはすへしされは代々の先達のよみかたのをしへも心はたしかにてこととはのつゝけからいやしからぬやうにかとうけたまはれば前にも申ことく此物語は此道の經書にして和歌家の至寶なるへしといへば或人れいのうなつく

○其七 正傳説誤

宇治大納言物語に云越前の守爲時源氏は作りたるなりこまかなる事ともをむすめにかゝせたりけるとその後のみや此事を聞しめしてむすめを召出したるける此源氏つくりたる事さまく申し傳へたり

参りて後作りたりとも申す何れかまことならん無名抄に云大齋院村上女十宮より上東門院へつれなくさみぬへき物語やさふらふとたつねまいらせ給ひけるに紫式部をゆして何をかまいらすへきと仰られ合せければめつらしきものは何か侍るへきあたらしくつくりて参らせ給へかしと申ければさらば作れと仰られけるをうけ給はりて源氏をつくりけるこそいみしくめてたく侍れといふひと侍れば又いまた宮仕もせて里に侍りける折さる物語作り出たるによりて召出られてそれより紫式部といふ名はつきたると申すいづれかまことにて侍らん今按此物語作りし事古くよりたしかなる説なくて人々たゞ口にまかせてさまくいひ傳へたればこそいづれかまことにて侍らんとかゝれたりけめ爲章か料簡を以て見ればいづれも誠ならずしてみな偽なりまつ大綱は爲時か作りてこまかなることゝもをむすめにかゝせたりといふは一向に文章のくさりをもしらぬ無下の人の申傳へなるへし卷々の意を見るにをとこにては思ひもよらぬ事おほくして極めて婦人の趣向なるうへ詞のつゝき

一人の筆ならてはかきくたされぬくさりなり一部にわたりて委よむ人は誰とても此説にまよふへからす況前にしるしたる才徳兼備と七事共に具りたるを思ふに父か力をからすとも此物語はたやすく出さなまし且又長保寛弘の頃は爲時はやく卒したるもしるへからすまたかの日記はもとより父の力をからざる物のうへ筆にまかせて書たる物なれともその筆様この物語にをとるへしや日記をくはしく見る人は更に此妄説に迷ふへからす宮仕のこと長保元年十一月 道長公長女彰子入内居藤壺二十二年三月 彰子立后十三歳三年四月廿五日 紫式部か夫左衛門權佐宣孝卒四年五年 寛弘元年長保六年二年 三年 今按式部か中宮へ参初たるは此二年三年の程なるへし下にひく日記の文を思ふへし四年 中宮彰子 二十歳此夏式部に文集の樂府を習ひ給ふ其文前に出たり五年 中宮二十一歳九月十一日御産後一條院御降誕也

むらさき日記とし七月文云おまへにもちかう
さふらふ人々はかなき物語するを聞しめしつゝな
やましうおはしますへかめるをさりけなくもてか
くさせ給へり御有様などのさらなることなれと浮
世のなくさめにはかゝるおまへをこそたつねまい
るへかりけれとうつし心をは引たかへたとしへな
くよろつ忘るゝにもかつはわやしき云々

今按此文を味ふに宜孝卒して式部やもめになり
ての中宮へ参り初しか大かた里かちにて折々
に参りその里すみのものうき心より浮世のなく
さめには以下の述懐かましき文と聞ゆ

九月十一日御産當日の文 云大納言の君少將の君
宮の内侍辨の内侍中務の君大輔の命婦大式部の君
も殿の宣旨よいと年へたる人々の限りにてこゝ
ろをまとはしたるけしきともものいとことたりなる
にまた見奉りなる程なけれとたくひなくいみし
とこゝろひとつにおほゆ云々

今案また見奉りなる程なきは式部新参なれば
なり

十二月廿九日の文に云しはすの廿九日にまへるは

しめてまいりしもこよいのことそかしいみしくも
夢路にまとはれしかなと思ひ出ればこよなくたぢ
なれにけるもうとましの身のはとやと覺ゆ云々
今按初参の事を思ひ出たる文を見るにも新参の
はとしられたりされは物語と日記とを見て式部
か氣象とその時宜をおしはかるにたとへは大齋
院より草子御所望あらん時中宮式部をめぐして何
をかまいらすへきと仰せ合せられんに新参の式
部さかしたちてめつらしき物は何か侍るへき新
しく作りて参らせ給へかしとて頼てみつから其
任にあたりて此物語を作るべしや一といふ文字
をたにしらぬかほなる式部か謙退ふかき氣象を
知らぬ人の妄傳なるへし父爲時ははやく身まか
り夫宜孝も卒して後いまた宮仕もせて里に侍り
けるやもめすみのつれゝにさる物語作り出た
るをきこしめして召出されてそれより紫式部と
いふ名はつきたると申説こそまことにて侍らめ
とおほゆ

河海抄云西宮左大臣安和二年太宰権帥に左遷せられ
しは藤式部をさなくよりなれ奉りて思ひなけくこ
ろ大齋院より上東門院へ珍らかなる草子や侍ると尋

ね申させたまひけるにうつは竹とりやらの物語はめ
なれたればあたらしくつくり出して奉るへきよし式
部に仰せられければ石山寺に通夜して此事を祈り申
けるに折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のす
みわたるまゝに物かたりの風情それにかひけるを
忘れぬさきにとて佛前にありける大般若の料紙を本
尊に申うけて先須磨あかしの兩巻を書はしめけりこ
れによりて須磨の巻に今宵は十五夜なりけりとおほ
しいてゝとは侍るとかや後に罪障懺悔のために般若
一部六百巻をみつからうつし書て奉納しける今にか
の寺にありと云々

今案河海はさもめてたき御方の御作なるにかく段
々妄傳をしるしをかせ給ふ事尤いふかしくおほえ
侍る作者のめてたきにつけては見る人これを信用
し爲章等こときもの、申事は百に一そのことほり
ありてもづさんなりと思ひけすめれとおほしき事
いはねは腹ふくるゝわさなれば筆にまかせて侍る
源範政朝臣か提要といふ物にも西宮殿の左遷のこ
ろは式部はをさなかるへき歟もしは生れざる前の
事なるへしといへり冷泉院安和二年より寛弘元年

まては三十六年なり紫日記を以て思ふに安和の頃
式部たとひ生れたりともいまた襟襟につままれて
侍らましをさなきより西宮殿になれ奉るといふは
年次をも辨へぬ無下のそらことなり石山参籠の事
は稱名院内府も八月十五夜石山寺にてかの式部か
筆をたてしむかしの事或説ながら語り傳へたと
書給へるはうけかひ給はぬ様なり物語のふせいそ
らにうかひけるまゝに忘れぬさきにとて須磨明石
より書はしめたりとは式部か心のうち也それを後
の人はいかに知り侍りけんと獨笑せられ侍るたゝ
桐壺より次第にかきくたしたりとみるへし爲章わ
かき程この河海の説を信してかの自筆の般若見ま
はしくて石山にてあしれる坊に逗留して其事を
たつねさくり侍りしにはやくそらことにてそ侍し
但源氏の間と名つけ式部か畫像を書此頃やらの
机硯などを設けたるはいつれの世何人の好事にや
又云其後次第に書くはへて五十四帖になして奉しを
權大納言行成卿に清書させられて齋んへ参らせら
れけるに法成寺入道關白奥書をかゝれていはく此物
語世にみな式部か作とのみ思へり老比丘か筆を加ふ

る所なり云々

今按正徹法師なども此説を信して紫式部かことのはとして藤氏の長者御堂關白殿筆を加へ給ひけるとかけり細流抄には此おく書の事をあまりうけがはすしてされとも自然の事なるへしとあり爲章か料簡ならば自然の事までもなく一向に妄傳と申へし其故は上に載る所々段々みなもてうけかたければこの奥書の事も又なそらへて知へし且道長公奥書かき給ふへくはいまた殿といはれておはさん程の事成へきに老比丘の詞あたらず又寛弘より十餘年のち寛仁二年に道長公五十四歳入道して法成寺にこもりおはさむ後たとひ齋院より上東門院へ式部か先年作り置たる源氏一部御所望ありとも入道殿今はひたすら修行專一の御心にてかくのことくいはけなき我慢のおくかき書給ふへからす此奥書といふ物のいはけなき式部か才をおとして自慢の筆は入道殿の御爲にもものうき書さまなり無下の人此物語の奇妙なるに驚きてたかためにもよからぬ作りことゝしるへし

細流抄云凡日本の國史は三代實錄光孝天皇仁和二年

八月までの事を記して其後の國史此物語を記すに醍醐の帝よりしるす心は上の日本紀にしるしつらん意なり尤廣才の所爲なり云々

今按作り物語にも似合ぬことゝしき見やうなり是は榮花物語などの評にや叶ひ侍らん此料簡用ひかたし

又云作者の本意人をして仁義五帝の道に引いれ終には中道實有の性理を悟らしめて世出世の善根を成就すへきとなり

今案これも又ことゝしき過稱なり此外古き抄物ともに或は莊子か寓言にもとつけりといひあるは史記左傳をうつせりといひ又台家にかたよる人は天台の六十卷になそらへ四諦の法門を思ひよせたりなと儒佛の家ゝみつからのひくかたにまかせて式部かほむにもあらぬ道理におとすめり尤五十四帖のひろさ中にはをのつから儒佛の道理にもかなひ漢家本朝の故事を思ひよせたる事もおほけれどもその本意儒佛の道を明さんともあらす實錄にそなへむともあらねは其意を得て講すへくなむ

寶物集に妄語戒を説て云まぢかく紫式部か虚言を以て源氏物語を作りたる罪によりて地獄にをちて苦患しのひかたきゆへにはやく源氏物語を破りすて一日経をかきてとふらふへしと人の夢に見えたりけるとて歌よみ共より合て一日經書て供養しけるはおほえ給ふらんものと云々

今按是は夢中の妄想なればとかく論するも筆の費なれとも新勅撰集釋教部を見るに紫式部かためとて結縁經供養し侍りける所に菓草喻品を送り侍る權大納言宗家法の雨に我もやぬれんむつましきわかひらさきの草のゆかりにといふ歌を載られしも其一日經書て供養の時勸進の歌とみえたり又表白といふ物も其時なと作れるにやはかなき夢をやかて現の實事に思へる人もありて式部か諷諭教戒の物語を却て妄語の罪をおはせらるゝなんまことにうたてき事にして心淺き人のまよひと成へし凡諸抄にさまゝの料簡臆説あれともさのみはとて只一二をわけて他を例しはべりかの宇治大納言物語などは古き物なるにそれすら妄傳を記されたればまして後々の説ともはうけかたき事おほくを侍る

べしすへからく物語の上にて其氣象を推はかり日記の面にてその事實を考へ侍らばあやまりすくなかるへし

そもゝ爲章むかし竹園伏見殿實照院眞親王に侍し時此物語を好て中務大輔冬仲朝臣の講釋をき、先考内匠頭朝臣の聞書を申請共中院通村公又乘胤法橋鳥丸實隆卿の御弟子なりの談義を傳へかつ中院亞相通茂卿の御説を受給へり水原河海花鳥岷江などの諸抄に心を盡し侍りぬ其後あつまに下向し水戸侯權中納言光國卿の彰考館に侍りて李部王記御堂殿日記小右記權記左經記台記玉海明月記玉葉記以下ちかき世の二水記などまで數百部の舊記をよみて故實に於てはや、不審をはるけ侍りたれと紫家の本意はなはいふかしくのみ侍りたるにたまゝ紫日記を得てしはゝゝみかつ章段をわかち侍るまゝにをのつから其文體と情態と物語の趣にたかはぬ事をさとりて此七論を草稿して櫃にをさめ侍りたるに過しとし難波江や高津の宮のはとりなる圓珠庵契沖あさりのかり行て萬葉集の不審を傳受し侍りしついで此物語の談にをよひて愚按と符合したる事とおほく侍しかは旅行

に友をえたる心ちによるこひ思ひ給てかの草稿を
清書し侍る事になりぬたし先達の非をいま見る
ことく此七論にもきはめてあやまちおほく侍らん
まゝ又後のひとこれをあらため正し給ふへし
むらさきのゆかりゆかしくたつねてもなほわけ
まよふむさし野のはら
時に元祿十六年重陽の日武州小石川の寓居にして
しるしをはり侍りぬ

安藤右平爲章撰

紫のゆかりに咲る藤原のぬしを年山先生と號して
もと吳竹のそのふにねさしつゝ都のうちをそたち
中頃より彰考館に参りてからやまとの文てふ文を
ひもとくあまりこの七論をえらひて紫家の隱徳を
あらはし物語の本意をしめさるゝ事たなこゝろを
さすかことし千歳の下つかたに生れて式部を知る
事かくのことく委しきは誠に先生は紫家の楊子雲
と云てまじ資矩も曾てより同じ館に侍りて物語の
抄物かの京極中納言の奥入よりはしめ也足公の眼
江にいたるまであまねくさくりひろくもとむとい
へともなを一もとのねもころに武藏の草のしけ

藤原治之

一もとのねもあらはれてむらさきのゆかりまよ
はぬむさしのはら

紫家七論一帖水戸相公家安藤新介爲章所撰奇評確
論可謂物語指南也翫味無飽寫以藏之

尙友軒枝月叟

みに分まよふをりしもこの論をよみて式部か辯徳
のまめやかなると七事のうちあひたるより冷泉院
のものゝ紛れの大事なとまてとし頃のいふかしさ
をはるけ侍りていよゝ紫のうへなき色をあかす
あはれにおほえ侍る事ひとへに先生のいさをし淺
からすなんされは此論はかの物語の寶永き名にあ
ふはしめの年五月雨の頃清書の筆を染へきよしの
もとめいなひかたくて武陽大塚の草ふかさわたり
末葉の露をしたてゝその功とけ侍るつゝてにしろ
し侍りぬ「香竹居」伴資矩

筆とりて君か手そめのいくしほに

なをむらさきのことまざりけり

年山先生安藤氏字右平 諱爲章 ひろく儒佛の書をよみあま
ねく本朝の舊記歌書をもてあそはるゝあまりに源
氏物語の七論をえらひて式部か女徳を顯はし物語
を歌道の經典と稱せらるゝなん實も適當の論にし
て古今未發の評なるへしされはあまたの抄物の眼
目となりて紫の上なき色を染ますは此論なり予か
つてその講席にあつかりしゆかりのかれかたく校
合のついでにかの先生の歌を和し侍りける

室松岩雄

古内三千代

辻陳雄

保持照治

校

大正貳年五月廿五日印刷
大正貳年五月廿八日發行

有所權著作
製複刻翻許不

校訂編輯者

室松岩雄

發行者

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
株式會社 皇學書院
右代表者

印刷者

目黑和三郎
東京市麴町區飯田町五丁目六番地
中山千二

印刷所

東京市麴町區飯田町五丁目六番地
大正社

東京市麴町區飯田町五丁目八番地

發行所

株式會社 皇學書院

定價金貳圓也

~~83~~
~~85~~
~~63~~
~~85~~
63
85

終